

届け、森林再生の心技

平塚市の「進和学園」



森林再生や町の緑化を目指して植樹用のポット苗づくりを行う平塚市の社会福祉法人「進和学園」(同市万田)の活動を学ぼうと、アジアやアフリカ計7カ国の専門家ら12人が13日、同学園を訪問した。国際協力機構(JICA)の事業の一環で、来日した研修生たちは興味深そうに森づくりの理念やノウハウに耳を傾けていた。

(牧野 昌智)

アフリカ 研修生が木々の成長視察

JICAの委託を受けたニールハウスで育成している国際生態学センター(横浜)が、先駆的な苗づくりに挑んでいる進和学園に協力を要請した。

同学園は、2006年春から、施設の知的障害者らが拾ったアラカシやスタジイなどのドングリを大型ビ

ト苗を栽培し、植樹祭などのイベントに販売するなど森の再生に貢献している。JICAの研修生は各国で森林や水資源を専門とする行政マンや研究者で、県内の環境保護活動の現場を約1カ月半かけて訪問している。

この日は、同学園が取り組む「いのちの森プロジェクト」の説明を受け、実際に苗を育てる「どんぐりハウス」や植樹した後の木々の成長の様子などを視察して回った。

ファイリピンの環境プランナーのクリスさんは「施設で苗を育てて緑化に貢献するだけでなく、障害者の収入にもつながっているのが素晴らしい」と話していた。

6月に植樹した苗の様子を視察するJICAの研修生

平塚市万田